

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十三年十二月十五日発行
(毎月一回・十五日発行)

(通第一〇五号)

慈

光

第九卷

第十二號

目 次

歳末の所感……………花田正夫…(1)

親鸞聖人の徳音……………近角常観…(3)

大経結びの段……………福島政雄…(10)

——大平和の世界へ——

歳末の所感

花田正夫

昭和卅二年も暮れようとして居ります。歳末ともなれば例年の様に、蓮如上人の短刀直入な、言々肺腑をつく御誠めが心に浮んで参ります。

『無益の歳末の礼かな。』

歳末の礼には信心をとりて礼にせよ』

これは明応四年、上人八十一歳の暮、十二月五日の夜のことでありました。すでに祖師聖人の御正忌もねんごろに厳修せられて、六日には富田殿へ御出発といふ時、山科の御坊に大勢参集するので、これはどうしたことかと、法敬房におたずねになると、歳末の御礼に参つたらしう御座います、とお答へしたところ、即座に、打てばひびく様に、この金言がほとばしつたのであります。

すべて、力まず、飾らず、つくろはず、不用意の中に、もれる言葉といふものは、その人の生地^{なまぢ}の心の発露^{はつろ}で、よかれあしかれ聞く人の心の底に深く刻みこまれるものであります。

上人の御晩年に、お側を離れず、おつかへ申した法敬房の聞きとつて下さつたこの一句をとほして、老上人の心内

『万事信なきによりてわろきなり。善知識のわろきと仰せらるゝは信のなきことをくせごと、と仰せられ候』

その反面に、信心の人をほめられては『見るからにたふとくなり候』とも『たとひ片目つぶれ、腰をひき候やうなるものなりとも、信心あらん人をばたのもしく思ふべきなり』とも仰せられ、更に『一人なりとも人の信をとりたることを聞きまし』とは誰も知る上人の御練言でありました。憶へば、波瀾万丈、多事多難、八十五年の御生涯を貫いて、真宗再興の大偉業を完成された老上人の胸には、歳末も、歳旦もなく、『信心をとれよ。弥陀をたのめ。一度のちがひが一期のちがひよ。今日ばかりと思へ。世間のひまをかいても聞けよ。等々』、縁にふれ、時にふれて、烈烈火と燃えてほとばしり出る言々句々は、一切の煩惱の薪木を焼きつくさずばやまじと示現下さる光炎王仏の尊容を髣髴として拜し奉るのであります。

噫、かくまでの御苦勞おかけ申すも、不急のことを争うてやまぬ私共の煩惱熾盛の故であります。ことに歳末ともなればなほさらのことであります。内に外に、あのこと、このことと煩惱に駆使され続けて居ります。然しそれはひとり歳末ばかりではありません。私共の日々夜々が皆さう

に焰々火と燃えてやまぬ切なる願心に触れ、ただ頭がさがるのであります。

さて斯様に歳末に仰せられたのは、線香花火的な一時の感情からではありません。明応二年、上人七十九歳の正月一日に、年頭の御礼にまかり出た勸修寺村の道德にむかはれて、

『道德はいくつになるぞ。道德念仏申さるべし』

と直ぐに勧めて居られます。更に又、

『まことに一人なりとも信をとるべきならば、身命を捨てよ……』

又御病中、口中を御煩ひになつた時、

『あゝと御目をふさがれて仰せられ……やゝありて、人の信なきこと、身をきりさくように悲しきよ……』

とあり、平素の御持言にも

なのであります。

こゝに日々仏前に誦し続けられた善導大師の日没の無常の偈文が、打ち寄せてやまぬ波浪の如く、私共の心にひびいて参ります。

人間総々として衆務をいとなみ

年命の日夜に去ることを覚えず

燈の風中に滅する期し難き如し

忙々たる六道、定趣なし。

未だ解脱して苦海を出づるを得ず

云何安然として驚懼せざらんや

各強健にして力ある時に聞きて

自策自勵して常住を求めよ。

私は嘗て真田増丸先生をおたづねしたことがあります。その時、先生は御居間に『今日も人の死ぬ日にて候』の一軸を掲げて居られると聞き、そのわけをおたづね申すと「何時もわしがそれを忘れるからじや」とお答へ下されたことがあります。

誠に『朝夕かゝる浅間しき罪業にのみまどひぬる』身に『後生の一大事、一心に弥陀をたのめ』との仰せは、そのまま『篤く三宝を敬へ……夫れ三宝によりまつらざるは、何をもつてか枉れるを直うせん』との聖徳太子の御意にかよい、『信心為本』の祖師の玄意そのまゝであります。

親鸞聖人の德音 (三)

近角常観

さて、斯く言へば易き事のやうなれども、これが中々易くはないのである。いらざる比較をするでは無けれども、同じ法然聖人の御教化を聴聞なされたお弟子は沢山あつたけれども、ここをお示し下されたは、親鸞聖人御一人なのである。法然上人『選択集』のお言葉に

然れば則ち、弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催ふされ、普く一切を眞ぜんが為に、造像起塔の諸行を以て、往生の本願と為さず、唯称名念仏の一行を以てその本願とする也。

と。「弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催ふされ」茲である。ここが本願の初め、生命なのである。ここを頂かぬと、我々お慈悲を頂くに、或は横着になり、遠慮に流れ、浮いたり沈んだりして仕舞ふのである。我々お慈悲の頂けぬは実にここ一ヶ所が頂けぬからである。

同じことが西山土人になると、常に言ふ法然上人より親

鸞聖人に御付属なされた、善導大師の御文

若し我、成仏せんに、十方の衆生、我が名号を称して下十声に至らん、若し生れずば正覚を取らず。彼の仏今現在に成仏したまへり。当さに知るべし、本誓重願虚しからず、衆生称念すれば必ず往生を得。

この文を読んで、して見れば我々は助かる事にもう決つてある。仏は十劫の昔に「若し生れずば正覚を取らぬ」とお誓ひ下されて、其の正覚すでに御成就なつてあるのだから、我々の往生はその時にもう決つてある。心配はいらぬと。斯くなるといかぬのである。

すると昔から能く間違ふ如く、本願の出来た時に我々を助くる親は出来上つて下されてあるのだから、我々はすでに助かつてあるのである、といふ事になる。これでは仏の遣る瀬無き心は一寸も頂けて居ない。親は自分に物を下さるから有難いと喜ぶ喜びでは実はまだ親にそれ程心配かけて、我が身の浅間しさがちつとも分かつて居らぬのである。

其処で、**帰命の命の字を十劫正覚のいのちと読み、我々そのもとの生命に帰るのであると言ふ時は、我々はもとほ仏なりしも迷ひのため三界に流転して居たのであるが、それが今もとに帰るといふ事になり、樂になり浮いて仕舞つて駄目である。而して斯く言ひて、真に心が樂になり、安心が得られるかといふに、ちつとも樂にならぬ。矢張り我身の浅間しきことが気にかかる。**

其処でこの度は何うしても浅間しき心が止まぬ、有難くならぬ、もつと真面目になれさうなものである、どうも私共お慈悲を頂いても、日常生活の上に悪を思ふ、つくづく人生の悲哀を感じる、などといふやうな事を言ふ。これは、一応大変よいやうであるけれども、斯くなるると益々自分が悪しくて仕様がないうやうになつて仕舞ふ。これは、即ち帰命を「命を捨てる」と読む方の側で、真面目は実に真面目なるも、斯うなると鎮西土人流の安心となり、死ぬまで念仏を称へづめにして、真面目にして居なければならぬ事となる。其の態度の殊勝なる事に於ては、実に尊い限りであるけれども、これでは矢張りいつまでも心にこころ淋しい処が離れぬ。

処で、親鸞聖人は如何にお示し下さるかと言ふに、十劫正覚の仏が出来上つて下された時に、既に我々は光明中の身として頂いてゐるのであると言ふは、横着に頂いてゐるのである。

それならばとて、これから、すがり、頼み、求むるのであると言ふは、親の遣瀬なき親心が未だ頂けず、親に対して隔て心を以て向つてゐるのである。

然らばどうかと言ふに、成程、十劫正覚の昔より仏が待ち受けて居て下さるは、我々罪惡の者が助からぬ故、それを助けたいの御一心より、十劫以来、仏となりて現はれて居て下さるので、親はこれ程に思ふぞよと、あなたの遣る瀬なき親心は、十劫正覚の暁天より今日今時に至るまで、念々切々、足を爪立て声を枯らして待つて居て下さるのである。然しながら仏がこれ程お思ひ下されてあつても、その遣る瀬なき親心が、衆生に届いて下さらぬ時は、何にもならぬ。

即ち先きの文に「若し我れ仏を成らんに、十方衆生、我が名号を称へて」とあるは、即ちこれを衆生に届けねばならぬからあるのである。又「和讃」に

十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなはし

撰取してすてざれば阿弥陀となづけたてまつる。

十方微塵世界の、罪惡の衆生、とあつてもよきさうな
に、特に念仏の衆生とあるが矢張りこれである。この遣る
瀨なき親心が、いよく衆生の心に届いて下された一念
が、即ち念仏の衆生、この、我がこの親心を届けてとある、
ここが実に有難い処なのである。

そんならとて、然らばこれより一心にならんならむと思
ふは駄目、此方がその一心になれる位なら、仏はこの親心
を知らせてとは仰しやらぬ。その一心になれるその者を、
その心の浅間しい其処が可哀想である、常に言ふ、病氣や
不具の子供の如く、その善くなれぬところが可哀想である。
…その如き者を助け救ふために我は現はれたのであるか
ら、どうかこの親心を聞き、安んじて呉れと、遣る瀨なき
思ひにて、常に我々に向つて、下さるのである。

そこで親鸞聖人の「帰命」は、正覚の命にもあらず、捨
てる命にも非ず、どうかと言ふに『行巻』に
帰命といふは本願招換の勅命なり。発願廻向といふは
如来すでに發願して、衆生の行を廻施したまふの心な
り云々。

即ち親鸞聖人の帰命は、仏が衆生のその罪深き者を助け

今日、子供が亡くなつて人生が思ふやうにならぬ、又病
氣のために人生が思ふやうにならぬと歎いて居られる方が
ある。実に尤もであるが、如何にしても人生は、冷やかな
る生死の海、無常の世界である。この生死無常の人生にお
いて、真にその者を遣る瀨なく思召し下さる親様がおいで
下されて、汝を待ち兼ねるぞ、との廣大の親心である。

その親心を何て我々の心に貫き届けて下さるかと言ふ
に、南無阿弥陀仏は、その親様の名前である。名前のみな
らず名義相應して、その南無阿弥陀仏の中に、今言ふ遣る
瀨なき仏のお心を残らず籠めさせられてあるのである。南
無阿弥陀仏の六字は、実に、唯の六字に非ず、斯く長々の
御苦労で現はれ下されたる仏全体のお心がみな籠つて、下
さるのである。『正信偈』の中には

重ねて誓ふらくは名声十方に聞えん。

普く無量、無辺光。無碍、無对、光炎生。

清浄、歡喜、智慧光。不断、難思、無称光。

超日月光を放ちて塵刹を照らす。

一切の群生、光照を蒙る……。

とある。昨夜もふと思つたのでありますが「十方微塵世
界の念仏の衆生をみそなはし」と謂ひ、又茲には「塵刹を
照らす」など、平素はうつかり思つて居るのであるが、実

救ふために来たのであるから、夫れを心配するな、斯く親
が待ちかねて居るぞ、この親心を聞けよと、仏よりして呼
びかけて下さる。その遣る瀨なき仏よりの勅命であると
示し下さるのである。若し人格的といふ事を言ふならば、
これぞ実に人格的の御呼声、我々罪惡の者がこの度助かる
は、実にこの御呼声一つで助けて貰はれるのである。遣る
瀨なき親様が、こちらの浅間しき心の底の底まで知り抜い
て、その浅間しき心がちつとして見て居られぬでないか、
と、

待ちかねて恨むとつげよみなひとに

いつをいつとていそがざるらん。

その遣る瀨なき心より、種々に広化身を現はして御苦労
下さる。その親様の遣る瀨なき御勅命が、即ち帰命。

で親鸞聖人は

「帰命といふは本願招換の勅命也。発願廻向といふは如

来すでに發願して衆生の行を廻施したまふの心なり」

…即ちこれ、法蔵因位の本誓であり、これ即ち阿弥陀仏
の廣大の親心である。覚如上人が「ここに祖師聖人の化導
により法蔵因位の本誓をきく」と言はれたも、この呼声一
つであります。

に広大な、思うても見やうの無い、広い世界を照らし下
さるのである。その広大な御心そのままを南無阿弥陀仏
の六字にして、これを以て呼びかけ下さる、実に広大な親
の光明、広大な南無阿弥陀仏の御呼声である。で又『正信
偈』の中に

「定散と逆惡を矜哀して、光明名号の因縁を顯はす。」

と、又更に

「本願の名号は正定の業なり至心信樂の願を因と為す」

実に此の仕様の無い私を助ける為に、此の広大な光明
名号の因縁を以て、お照らし下され、私の心にその遣る瀨
なき親心を届けて下さる。而して此の因縁に照らされて
いよいよあなた、其の遣る瀨無きお心が届いて下された時が
「至心信樂、己を忘れて、速に無行不成の願海に歸す」の
である。この『式文』の「至心信樂、己を忘れて」とある所
が、実に親心の貫徹して下さる一念である。その一念に

「弥陀の誓願不思議に助けられ參らせて往生をば遂ぐる

なりと信じて念仏まふさんとおもひたつ心のおこると

き即ち撰取不捨の利益にあつけしめたまふなり」

此の一念に漕ぎ着けるために、親は長々御苦労して下さ
れてあつたのである。親は子供を育て、色々学問させて、
而して一代何処で満足するかといふに、子供の成功を以て

満足するものではない。あゝ親は私のため、斯くまで御苦勞下されたのであるが、有難い、と、子供に親心が真に貫徹した、その一声聞く時に、初めて真の満足をして下さるのである。

今大悲の親様は「十方微塵世界の、念仏の衆生を見そなはし撰取してすてざれば……」又「念仏申さんと思ひ立つ心のおこるとき、即ち撰取不捨の利益にあつけしめ給ふなり」……今日まで、この広大なお心頂かずに、浮か／＼暮して居たが、あゝ斯くまでこの仕て見様なき私を助けるために長々御苦勞下され、待ちかねて居て下されたお慈悲であつたかと、初めて気が附いた時は、思はず知らず、念仏称へずには居られぬ。彼の数年前、物故せられた福間氏が『獲信の記』には

「予は期せずして自然の中に念仏を称したり」

とある。今迄念仏など少しも知らなかつた人が、氣のついた一念には、思はず知らず、南無阿彌陀仏と口を衝いて念仏が浮んで下さるのである。この一念が即ち「十方微塵世界の念仏の衆生」として頂いた一念である。段々頂き来れば、茲はどうしても念仏の衆生とならねばならぬ所、実に有難き極みであります。

から拝むやうに附いてあるのでは無い。仏はあなたの遣る瀨なきお心が此方の心に届くまでは満足に思し召されぬ。即ち、南無とは、先き程より段々に言ふ如く、此の親心を知らさずには措かぬとあるあなたの勅命が、弥々私の心に届いて下された一念の時である。故にその一念が即ち、後生たすけたまへとたのむ頂き心地となるのである。

今年の夏であつたが、安芸の祇園の西本という方の処に泊つた時に、其の夜法話会が初まつた。其の時、そのお宅の方が、

「十方微塵世界の、念仏の衆生をみそなはし」とある、この念仏の衆生が邪魔になつて困ると言はれる。

私はそこで、それなら、罪惡の衆生とあるとあなたの心にはよいのかとお尋ねすると、さうだ、と言はれる。そこで私は、例の姨捨山のお話をして、親は我々が悪いことをしてもよいと言つて下さるでは真に安心は出来ぬが、弥々親を捨てて歸らうとする時に

「我は実に汝の将来を案じる。我はこのまゝ死するとも汝あつて必ずよくせよ。汝が道に迷はるかと思つて、道すがら汝のために道しるべをして置いてやつた程に、これを辿つて間違へぬやうに帰れ」

猶ほこれにつき、近頃私は「御文」の御教化の如何にも有難い事をしみじみと味はせて貰ひ、喜ばせて貰うて居る。誰でも「御文」で困るのは、南無といふは、阿彌陀仏助け給へと頼むところであるとの御教化である。これが余り多いので、これが邪魔になり、みんなが困るのである。ところがこの邪魔になる処が、一番肝心の処、いつでも邪魔になる処が、最も有難い処である事を思はねばならぬのである。

何うかと言ふに、南無の二字は、今言ふ親心の此方に届いて下された一念故、即ち阿彌陀仏後生助けたまへになるのである。南無の二字の味ひは、実にここにあるのである。『御一代聞書』の中には、

のたまはく、南無の字は聖人の御流義にかぎりて、あそばしけり。南無阿彌陀仏を(金)泥にてうつさせられて、御座敷にかけさせられて、仰せられけるは、不可思議光仏、無碍光仏も、この南無阿彌陀仏をほめたまふ徳号なり。しかれば南無阿彌陀仏を本とすべしと、おほせられさふらふなり。

南無阿彌陀仏と、仏のお姿の上に、南無の後生助け給へと頼むの二字の附いてあるは、阿彌陀仏と南無と、こちら

と言はれる。これが実に親様の御親心、勅命である。この親心、御呼声と頂いて見れば、悪くともよいと言つて下さるのであるなどと横着なこと言つては居られぬ。あゝ知らず居たが、此の親捨ての不孝者のために、親は夫程に苦勞して下されたのであるか、申訳がないと廻心懺悔する。これが即ち届いて下された一念である。この一念に思はず知らず、南無阿彌陀仏と念仏が浮んで下さる。これが念仏の衆生である。念仏の衆生とは、このたしかに親心の届いて下された処である。この広大な御心が弥々真に心中に徹到して下された暁には、是非共、念仏の衆生とあらねばならぬのであると、お話して求た事でありすが、南無の後生たすけ給へ、も、また実にここである。

南無は即ち親様の御道しるべである。この私の為に、飽くまで届けねばおかぬとあるあなたの遣る瀨なき御親心、勅命である。此の遣る瀨なき御親心、勅命故、私の心に届かずには居て下さらぬ。その弥々届いて下されて南無と頂いた時が後生たすけたまへと頼む信の一念であります

さてこの頂く一念に、親様は大満足して下され、あゝ長苦勞したはこ一つを汝に届け度いたためであつたと、その一念に、光明中に撰め取つて、撰取不捨の身として下さ

る。即ち『御文』に

「そのたのむところをよく知ろし召して、八万四千の大光明を放ちて、其者を撰取して捨て給はぬが、阿弥陀仏の四つの字のころ」

と、お示し下さるがこころである。

又釈尊は、この者を、『是れ我が善き親友なり』とお呼び下され、又『観經』には、「人中の芬陀利華」とお讃め下さる。『和讃』には

他力の信心うるひとを　うやまひおほきによるこべば
すなはちわが親友ぞと　教主世尊はほめたまふ。

釈尊は初めから誰でも、親友と仰しやるのでは無い。他力の信心を得て、敬ひ大きに慶ぶ者を、親友、ぞと言つて下さるのである。又親鸞聖人は斯く頂いた者こそ、「真の仏弟子」である、「吾が御同朋、御同行である」と仰せ下さる実に有難き極みであります。

然して、斯くの如き、遣る瀬なき大悲の親心をお聞かせ下されたは「ひとへに親鸞一人がためなりけり」と、九十年の御一生、御流罪の時も、関東御化導の時も、これを喜ぶまに御苦勞下されたが、親鸞聖人の御一代である。さりながら『式文』の中には、

方今、念仏の要義まぢ／＼なりと雖も、他力真宗の興

行は、即ち今師の知識より起り、専修正行の繁昌は、遺弟の念力より成ず。流を酌んで本源を尋ぬるに、偏へに是れ祖師の徳なり。云々。

これで頂くと、御入滅當時も、随分色々になつてあつたものと思はれる。然るに何の幸か、我々六百五十年後の今日、面の当り、実語を顕かに聴聞の出来る事、全く如信上人覚如上人を初め次第相承の善知識の御恩であります。

御伝鈔に仲冬下旬の候より御不例とあれば、丁度十一月廿一日よりの御正忌が聖人御病氣に當つて居るので無いかと思はれて厳かに感ずる次第であります。御臨末の御書に我歳きはまりて安養浄土に還帰すと雖も、和歌の浦の片雄浪のよせかけ／＼帰らんと同じ。一人居て喜ばば二人と思ふべし、二人居て喜ばば三人と思ふべし。その一人は親鸞なり。

われなくも法は尽きまじ和歌の浦の

青草人のあらんかぎり

又『歎徳文』には

然れば則ち蓮華蔵界の中にして今の講肆を照見し、檀林宝座の上より、斯の梵筵に影向したまふらん、云云。

南無阿弥陀仏、々々々々々々々々。

大經 結びの段

——大平和の世界へ——

福 島 政 雄

そこで、これから不思議な光景が起つてまゐりますのであります。それはこゝで釈尊が五悪段をお説きになります時はズと弥勒菩薩を相手にしてお説きになつて居られますが、こゝで又あらためて阿難に向つて仰言る。阿難尊者がお聞きする、かういふ事に又變つて来て居りますのであります。弥勒菩薩はつまりこの前申しました様にこれから先の生れて来る何億、何十億、何百億といふ衆生の代表者であるといふところで五悪段をお聞きになつてゐるのであります。ところが阿難尊者がもつ／＼この大無量寿經の釈尊のお話を直接に伺つてゐた者でありまして、そこで釈尊はあらためて阿難尊者に向つて

「お前はこゝでちやんと着物を整へて合掌して無量寿仏を拜め、無量寿仏がそこに現れておいでになる」と仰言るわけでありまして、そこで阿難尊者は立つて自分の着物を整へまして、西の方をむいて合掌して、敬つて地に体を投げて拜んでゐるのであります。その時に無量寿仏がすぐにその眼の前に現れてお出でになつて、大光明を放つて一切の諸仏の世界をお照らしになる、ズート種々の山

の姿皆同じ一つの色に輝いて見える、丁度世界全体が水浸しになる時たゞ水ばかりといふ風に見えるやうに、この無量寿仏のお光の中に一切のものが皆包まれてしまつて、声聞た縁覺たと云つてゐるそれらの小さな光といふものが無量寿仏の大きな光に覆ひ包まれてしまつてゐる、そして仏様の光明が実に明るく、その中に色々なものが見えて来るのであります。

その光の中に見えて来るものゝ中に私共に問題となりますのは、その中に色々な衆生があらはれて見えますが、その衆生の中に胎生のもつと化生のもつとがある、さういふ問題であります。胎内から生れると言ふのと、化生で不思議にポーツと生れて来る、その二種類の衆生がある、それが解るか、と釈尊が仰言るのであります。さうすると胎生化生、成る程さう云ふ二種類が見えますが、どうして二種類のものがあるのございますかと云ふ事をおたづねしますといふと、その胎生といふのはまづ本當に仏様のまことをちか身に受けて居ない、どこか少し疑惑の心、疑ひ惑ふ様な心を持つてゐて、やつぱり自分の功德と思ふものを

修めてそしてあの仏の国に生れ度いと思つてゐる、さういふ人々が胎生である。それから化生と云ふのは仏のまことをすなほに我が身に受けて、自然に何の無理もなく何時生れたかわからぬといふ様にして仏の国に生れてゐる、それが化生である。さういふ風な事を仰言るのであります。

その胎生・化生といふ事について又私の事を少し申し上げて見たいと思ふのであります。胎生といふお言葉を聞きますと私はかう云ふ感じをおこしますのであります。丁度子供が母親の胎内に居る、さういふ心持でありますまいか。温い中に包まれてゐて氣持はいゝそれから何となく光は受けてゐる様であるけれども、確かに光を身に受けてゐるといふ感じはない、だからどう申しますか、何となく自分の命がこもつてゐるといふ心持であります。何にこもつてゐるかと思つてゐると、今釈尊が仰言つた様に自分はこんないい事やつて仏の国に生れるんだ、往生の爲にはかういふいゝ事もしなければならぬ、あゝいゝ事も云はなければならぬと云ふ様な事で、自分のいゝ事といふもので、いい事と思つてゐるもので自分の命の廻りを廻らして、自分といふものを包み隠してをります。で歎異抄なんかに疑城と云ひますそれでも同じ事でありませう。疑ひ、やつぱり自分の何かいゝ事を積んで行かなければ仏のお浄土に生れないのぢやなからうかといふ、それが何と云ひますか、

ふ、^{あた}辺りを行つたり来たりしてゐる、さういふ心持であります。ところがどうでありませう。私その時申し上げたかと思ふのであります、二十の願に徹したといふ事になりませうと私共は我が身の上におぢぎ／＼に仏の光を身に受けてゐる、仏のまことが自分の心に届いてゐるといふ事を自覚してゐる、といふ様なさういふ所が二十の願を身に受けてゐる心持であると申しましたかと思ひますのであります、ところが、その時私かういふ事を申し上げました様であります。併しながら私臼杵祖山先生から承つた事があります。十九の願から二十の願を通つて、それから十八の願に落ち付くと云ふんだけれども、それは十八願といふところに腰を据へてしまつた、これで何も彼も解決してしまつたといふ事にはならぬのである。十八願の世界に心が開けて来ると、十九の願、二十の願の世界に迷ふ自分の姿といふものがはつきり見えて来る、とかう云ふ事を伺ひましたが、これはどうでありませうといふ事を申し上げたと思ふのであります。さういたしますと、どうでありませうか。胎生と化生といふものを両方分れた別々の全く趣の違つたものと云ふ風に一応云つてありますけれども、併しながら胎生を通つての化生でありませう。それから胎生を通つての化生でありますと共に、今度は化生すれば胎生といふもの、胎生である自分の姿と云ふものが見えて来る、胎生である間に胎生である自分の姿といふものは実は見えないの

この自分の心の廻り、命のまはりに隔ての垣を作つてゐるわけでありませう。まあお城の中に閉ぢ籠つてゐるか、胎内に閉ぢ籠つてゐるか、さういふ隔ての垣の様なものをも自分の廻りに廻して、その為光を受けて居る様だけれども、どうやらと、かういふ心持、これは一方から申しますと、つまり私共が信仰を自分は得たかしらん得ないかしらん、自分の心は開けた様にもある、開けんやうにもあるがといふ様な事で苦しんでゐる、かういふ状態にも当りませうと思ふのであります。自分は開けた様にも思ふけれども、どうもぢかにまだ光を受けてゐる様な気がしない、つまり何かかゝる隔ての垣を廻らしてゐる、仏のまことといふものをぢぎ／＼に我が身の上に受けてゐないといふ様なところでありませうと思ふのであります。

胎生といふのはまあさういふ事ではなからうか、實際さういふ事なら私共経験のあることでありまして、自分はよつぽど心がかわつて来た様に思ふんだけれどまた何処か通らん所があるといふ様な心持が続いてゐる限り、それは疑城胎宮である、氣持は悲しくない、何か自分でいゝ事でも出来るやうに思つては居りますし、氣持は悪くないといふ面もあります。それからこれぢや信心とは言へないだらうといふ一種の苦しみもあるといふ様なところでありませう。

これはどうでありませう。例の三願転入と申しますと、あそこから伺ひますればやつぱり十九の願・二十の願とい

であります。もがいてゐるか、いゝ氣でゐるか、そんな事なのであります、自分の姿といふものは見えて来ない。それから化生といふ事に開けてまゐりますと、胎生といふ自分の姿がはつきり見えて来る。さういふことでありますから釈尊が胎生のものが五百歳ばかりを経てその間は常に仏を見奉らず、教法を聞かずと云ふ様な事を仰言つてゐますが、五百歳といふ様なところにある意味があるのであります。胎生を通つての化生、胎生と化生と全く別れ／＼の衆生になつてしまふのぢやなくて、胎生のものは必ず化生に生れ徹する、胎生のものを化生にまで徹せしめずにはおかないといふのが仏のまことである。それが胎生の境地にある自分に徹つて来て目が覚めると、化生の身となると同時に、胎生の自分の姿と云ふものが見えて来る、かう云ふ關係になりませうかと思ふのであります。私自分の事を考へてもさういふ事が云へますかと思ひますのであります。

それからその前に一寸申し上げべきことでありましたが、一体こゝに無量寿仏が出現なさつてをしておつて世界を照らされるといふのは、一体どういふところをおつしやつてゐるのであるかといふことなのであります、これは阿難尊者といふ方は御承知の通りなかく、悟が開けなかつた方である、釈尊のお弟子の内智の勝つた方、情の勝つた方、意志の勝つた人と別けて見ますれば、阿難尊者

は情の人であつたのであります。情の人であるだけになか／＼情深い所がありますかほりに、なか／＼仏のお悟りに徹する事が出来なかつた、だから御承知の通りに釈尊が御入滅といふ時には阿難尊者は非常に泣き悲しんだといふ事、他の悟の開けたお弟子からたしなめられた。そのあとで金剛子とかいふ方の言葉を聞いて始めて心が開けたといふ人でありませんが、非常に情の勝つた人である。情の勝つた人は一方にいゝ所があると同時に悟に徹するといふ所へ行くのに骨が折れるのであります。その阿難尊者を目前に置いて、今無量寿仏が出現なさる、それを拜めと仰言る。その阿難尊者の前に無量寿仏が大光明を放つて一切の世界を光に包んでお出ましになつた。そのところどういふ問題だらうと思ふのでありますが、これはやつぱり始めて阿難尊者の心に仏の大光明が射し始めた、浄土真宗に於いては「廻心といふ事たゞ二度あるべし」と歎異抄に仰言つてあります。たゞ一度の廻心といふその所の趣をかういふ風に云ひ現されてあるのであります、実は阿難尊者の事でない、私で申せば私の事なのであります。つまり私なんかの様に煩惱の非常に勝つてゐる。煩惱が非常に激しくてなか／＼断ち切る事は出来ないといふ様な者に最初に大光明を開かれる、その所である。つまり胎生である者が胎生である卵の殻からパツと生れて来よう、そのところの趣をかういふ風の云ひ現し方で釈尊が仰言つてゐる。私共はめい／＼実は大無量寿経の会座の遙の末席に居るわけ

有様である、といふ事を余程昔私の友人から聞かされた事でありましたが、實際さうなのであります。胎生の者といふものは、一方から言へば黄金の鎖で繋がれてゐて結構な生活の様だけれど、どうも不自由である。鎖が鉄でなくて黄金だからいゝといふ様なものぢやない。かういふ問題がそこにありますのであります。ところがなか／＼私共は自分を知らない内に黄金の鎖でつないでゐる、自分が自分をつないでゐるのであります、やつぱりなか／＼自由の身になれない。無碍自在といふところになか／＼行けない。さうでありませう。自分は駄目なものだとよく云ひますけれども、駄目なものだといふ奥底にそれでも自分はこんな取り所はあるといふ思ひが必ず潜んでゐるのであります。それは黄金の鎖なのであります。どこかで自分が無自覚の内にも自分自身を黄金の鎖でつないでゐるものであります。自分で繋いでゐる、そして自分でつないで居ながら不自由な内で不自由な生活を續けてゐる、かういふ有様なのであります。そこを釈尊が自覚させて下さる、胎生といふ言葉で一方私共の自覚を促し給ふと同時にこれは「繋ぐに金鎖を以てし」といふ様な事で私共の自覚を促して、實際自分で自分を黄金の鎖でつないでゐる様なものである、自分で自分の身の廻りに隔ての垣を作つてゐる様なものである、そこがわからんのかと仰言るのであります。わからん。實際自分をつなぎながら、自分で隔てを作りながら、そこはわかかつてゐないのであります。それがわかる

であります。もつとも私なんかも自分が大経の会座にゐるんだと始終考へてゐるのぢやありませんけれども、実はやつぱり大経の会座のはるか末席に座つてゐるのであります。そして阿難尊者が大光明に接して拜まれてゐるといふところ、私ならば私の心に仏のまことが届いてそして私の心が開け始める、そのところをかういふ風にお経の上で云ひ現されてあります。阿難尊者は私の代表であると云つてもいい、かとかういふ事になりますわけであります。それから釈尊が無量寿仏を拜めと、大光明の無量寿仏出現なさるといふところの心持であります。

それからもう一つ、で問題でありますのは、黄金の鎖を以て繋いでゐる、あそこ所であります。これは釈尊の譬へ話で仰言るところであります。立派な宮中に住しなから黄金の鎖で繋れてゐる人があつたなら、そして食べ物でも何でもいゝ物を豊富に与へられてゐるといふなら、それでいゝのか、さうぢやあるまい、いくら黄金であつても鎖で縛られてゐるのは非常に不自由であるから、何とかしてその鎖を断ち切つてでも自由の身になりたい、かういふ事を感じるだらう。そこで胎宮と云ふのは一面に於いてはそんな風であるといふのであります。黄金の鎖といふのは私昔友人などから聞かされてゐるのであります。黄金の鎖といふのは、我々が自分はこの立派な行をやつてゐるぞ、こんないゝ行があるぞといふ事で以て自分が得意になつてゐる、それがつまり黄金の鎖で自分が縛られてゐる

といふのはいよ／＼仏のお慈悲が身に徹して、底の底まで滲み込んで、あゝ自分は、なるほど自分は自分で黄金の鎖でつないでゐる様なものだ、自分が身の廻りに隔ての垣を廻らして胎生の姿に自分をしてゐるのだといふそこが見えて来る時には、化生してゐるわけであります。

自然と、仏のお慈悲の光の中に、何時の間にやら生れ出てゐる、その所なのであります。そこは非常に面白いと云つては悪いかも知れませんが、味ひの深いところでありまして、胎生・化生・金鎖といふ様な問題は私共の現実の生活の有様をさういふ譬で云ひあらはしてあります。そして大事なことは、自分はもう信心を得てしまつたぞと、これで解決したぞと云ふ事で腰を落ち付けてしまはれんものが私共にあるといふ事そのことであります。それで釈尊は阿難尊者に向つて「胎生の者があるといふ事を見よ」と、それに「化生の者があるといふ事を見よ」「金鎖を以て身を繋かれてゐるものがあるといふ事を見よ併しながらそれが五百歳である。」と。五百歳たつたらと仰言つてゐるのは、ある期間、ときがかゝるかも知れないけれども、必ず自分は胎生であつた、金鎖でつながれてゐた、自分で自分をつないでゐたといふ事に必ず目を覚させられるのであるぞと、目を覚させられると始めて自分が繋がれてゐる黄金の鎖が見えて来る、自分が廻らしてゐるところの垣が見えて来る、かういふところを仰言つてゐるのだらうと私にはさういふ風に受け取れますのであります。

編集後記

師走の風に早々として年が暮れて行きます。今年の正月は穏かで静かな、晴れて風なき元日でありました。そして今秋は三年にわたる豊作でありました。

慈光誌も内に外に、裏に表に、皆様御力添へに支へられて百号を越えて参りました。心のまゝに走り廻れない私には、月々小冊子を御送り出来まことが何より有難いことであります。歳末、襟を正して十方に謝しまつりませう。

然し四月には月々感激と法悦あふれる法信を下さつた可説居士と永別し六月末に廿余年來の信の友津島の小沢清治さんが亡くなられ七月には義母が逝きました。きびしい現実であります。

△親鸞聖人の德音、は聖人の常の仰せを中心とされて、求道者の最も難儀に思ひ、もてあます、そこに深い御味の

ましますことを明々白々と、常観先生が御身に掛けてお示し下さいました。

全身火と燃えて、單刀直入に、私共の肺腑をついて御勸化下さる中興上人の面影が、常観先生の息吹に感佩せられて参りますのは私一人ではありませんす。

△大経結びの段、福島先生の御講話は、常任靈鷲山上の仏陀の法音のなごやかに地にひびき渡る趣が拜されます。先生の御言葉によりますと、五十を過ぎられて「光顔たえにかがやきます」お光を仰ぎ始められ、明るさが増されました由、五十過ぎました私自身への警声と頂きました。

△歳末の所感は、連如上人の御教化を毎日拝読申して居ります私に、歳末ともなれば、なだれのやうに、上人の金言、実語が、びしびしとひびいて参りますまゝに、詠しました。

仏光照曜最第一 光炎王仏となつ
けたり

三塗の黒闇ひらくなり 大応供を
帰命せよ

御案内

○日曜例会。第一、二、三日曜、午後一時半。

一道会館。市電、新郊通り一丁目下車、東一丁半。

○毎月廿四日、午前、午後、法話会。

昭和区小桜町、教西寺、市バス、北山。市電、御器所通下車。桜花学園東。

定価 一部 十七円(送共)

半年 百円(送共)

一年 二百円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ二八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷 人 本田 政雄

名古屋市南区駈上町二ノ二八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光 第九卷第十二号昭和三十三年十二月十五日発行(毎月一回十五日発行)
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可